

日本計量生物学会ニュースレター第 102 号

2010 年 2 月 28 日発行

～．～．～．～．～． 目 次 ～．～．～．～．～．

- ① 巻頭言「医薬品開発と企業統計家の役割」
- ② 2010 年度日本計量生物学会年会のご案内
- ③ 親子休憩室の設置について
- ④ 2010 年度日本計量生物学会賞および功労賞候補推薦のお願い
- ⑤ シリーズ：計量生物学の未来に向けて
- ⑥ 日本計量生物学会ホームページのリニューアルについて
- ⑦ シニア会員の制度設立について
- ⑧ 日本計量生物学会 2010 年度理事会議事録
- ⑨ 2009 年第 2 回計量生物学講演会、特別セッション・チュートリアルセミナー報告
- ⑩ 2010 年第 1 回計量生物学講演会報告
- ⑪ East Asia Regional Biometric Conference 2010 報告
- ⑫ 学会誌「計量生物学」への投稿のお願い

～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．～．

① 巻頭言「医薬品開発と企業統計家の役割」

越水孝(ヤンセンファーマ)

医薬品開発の目的は、真に有効かつ安全な新薬を確実かつより早く患者さんのもとへ届けることです。ここ数十年、医薬品候補の増加、薬物標的に関する知識の拡大など新薬開発に関わるサイエンスやテクノロジーの進歩によって、画期的な高い新薬候補物質が次々と登場してきました。しかし、その一方で新薬開発を取り巻く環境はより複雑化・多様化し、研究開発の経済効率は大幅に向上すると期待されていたにもかかわらず、新薬開発の不確実性は必ずしも減っている訳ではありません。とくに近年、臨床開発の最終段階である検証の臨床試験において約半数が失敗し、試験のやり直しや開発中止を余儀なくされています。創薬・開発に長い時間と巨額の費用をかけた最終段階での失敗は、製薬企業にとって大きな損失であるばかりでなく、臨床試験に参加した被験者のボランティア精神や臨床試験に関わった医療機関の方々の努力を無に帰すものです。有望な新薬候補物質の開発を誤って中止したり、臨床試験をやり直したりするリスクを回避するための開発戦略・試験デザイン上の方策の一つがアダプティブ・デザインであり、その利用が 2007 年頃から欧米を中心に広がっています。本邦においてもアダプティブ・デザインは臨床試験で利用され始め、統計家の中での方法論に関する議論のみならず、臨床試験に関与する人たち（製薬企業、研究者、教育機関など）を交えて、その適切な運用に向けて活発な議論が続けられています。今後も医薬品開発を行う上での課題やニーズに応じて、生物統計学の関与は必須であり、統計家の果たす役割もなお一層重要性が増していくことでしょう。

欧米の製薬企業の統計家数名が共同で執筆した論文“Statisticians in the Pharmaceutical Industry: The 21st Century” (Chuang-Stein, C. et al, Statistics in Biopharmaceutical Research, 2009)を読む機会に恵まれました。私なりに共感できる点をこの場を借りてご紹介します。

製薬企業がかつてない困難な状況に直面している 21 世紀の変化の渦中、医薬品開発に携わる統計家がこの機をチャンスと捉えて才能を発揮し活躍の場を広げるにはどうあるべきかについて語られています。（医薬品開発のパ-

トナー、コンサルタントとしての）統計家に今後求められる資質として、統計学のスキルや医薬品開発に必要な知識はもちろんのこと、コミュニケーション・スキル、問題解決能力、コラボレーション・スキル、リーダーシップを発揮して、意思決定に関わることの重要性が指摘されています。医薬品開発過程での意思決定はより複雑化してきており、体系的そして定量的な評価に基づく意思決定に統計家が寄与することが期待されています。

統計的方法論の研究に着目すると、Proof-of-Concept 試験の評価、統計的モデリングを活用した用量探索方法、アダプティブ・デザイン、ベイズ流アプローチの活用、医薬品の安全性評価などが近年注目を浴び、研究者や企業統計家の間で活発な論議が続いています。統計的なイノベーションは今後もそれぞれの課題に応じて研究が進められ継続されることは疑いの余地ありませんが、その活動は企業間の協働、官学を交えての議論、場合によっては統計学の枠組みを超えた様々な研究者との協働によって推し進められることになるでしょう。

また、医薬品開発を取り巻く外的環境の変化への対応も重要な課題の一つです。今後、製薬企業に対して医薬品開発過程における透明性が求められ、臨床試験に関する詳細な情報やデータの開示が具体的に実現しつつあります。視点を変えれば、このようなトレンドは、臨床試験デザインのさらなる進歩やデータ活用の標準化を促進すると考えられ、情報の価値を最大化するための基盤作りに製薬企業が、そして統計家が深く関与することになるでしょう。さらに、今後益々重要視されるであろうベネフィット・リスクの評価、市販後のリスク管理においても、統計家は重要な役割を担うことになります。

このように、これからの医薬品開発において、統計家に求められる役割はより広範になり、その活躍の場は益々広がっていくと想定します。先に紹介した論文は次の言葉で締めくくっています。” Statisticians have enormous opportunities and certainly face even more challenges in the 21st century. <<中略>> Indeed, this is an exciting time to be a statistician!”

② 2010 年度日本計量生物学会年会のご案内

和泉志津恵, 大森崇, 服部聡, 三中信宏, 上坂浩之(企画担当理事)

2010 年度日本計量生物学会年会を 5 月 21 日(金)午後ならびに 5 月 22 日(土)に統計数理研究所にて開催します。また、5 月 21 日午前に同一会場にてチュートリアルの講演を実施します。年会の一般講演を募集しますので奮ってご参加下さい。一般講演申込は年会の「一般講演の申し込み」の項をご参照下さい。なお、今年より親子休憩室を設置しますので、お子様同伴でご参加いただけます。利用については「親子休憩室の設置について」をご参照ください。

本年会は応用統計学会の後援で実施され、両学会員は本年会、5 月 21 日のチュートリアル（計量生物学会と応用統計学会の共催）、並びに 5 月 20 日(木)開催の応用統計学会年会共に、会員価格で参加できます。本年会並びにチュートリアルの参加は、原則として事前登録することとしております。参加申込は、同封の申込用紙、もしくは HP：

(<http://www.soc.nii.ac.jp/jbs/index.html>)にてお願いします。

年会およびチュートリアル会場および参加要領

1. 会場 統計数理研究所

〒190-8562 東京都立川市緑町 10-3

<http://www.ism.ac.jp/>

2. 参加費

会員、応用統計学会員 年会・チュートリアルそれぞれ
3,000 円、非会員 5,000 円

事前申込 各 500 円引き

年会とチュートリアル一括事前申込の場合、両方合わせて
1,000 円引き

学生(会員、非会員共に) 1,000 円。

3. 参加申し込み期間

年会・チュートリアルは一括申込をお願いします

開始：4月2日(金)、締切：4月23日(金)

4. チュートリアル

5月21日(金) 9:30~12:00(予定)

テーマ：統計思考と分類思考—Rを用いた分類パターンの
認識—

講師：三中信宏(農業環境技術研究所)

【内容】データに基づく「分類」(classification)の構築とパターン認識は、現代統計学においては多変量解析の理論体系の中で論じられることが多い。しかし、人間が行なう認知行為としての分類のもつ意味は、統計学というひとつのサイエンスの中でのみ追究するのでは限界がある。今回のチュートリアルの前半第一部では、分類が担ってきた、多様な対象物に関するパターン構築を通じての体系化(systematization)を、クラスター分析の歴史的成立を例にとって考察する。統計的手法としてのクラスター分析はもともと生物分類学における数量表形学(numerical phenetics)という学派のツールとして1950年代に開発された。したがって、生物分類学史の文脈の中でクラスター分析を再検討することにより、分類思考と統計思考がたどってきた系譜をより深く理解することができるだろう。この理解をふまえて、後半第二部では、実際の研究の場でユーザーが直面する「定量的分類」の要請に対して、統計言語RならびにRコマンドを用いてどのようにクラスター分析を実践していくかを解説する。多変量データからの全体的類似度の計算オプションとクラスタリング・アルゴリズムの選択、さらにはマルチスケール・ブーツストラップを用いたクラスターの信頼性検定など、いくつかのテストデータを用いたクラスター分析のデモを通じて、「分類」という行為に含まれる虚実を疑似体験していただきたい。

5. 特別セッション

5月22日(土) 午後(予定)

セッション名：農学・生態学・進化学でのベイズ統計手法の応用に関する諸問題

オーガナイザー：三中信宏(農業環境技術研究所)

【趣旨】生物統計学の近年の応用研究では、ベイジアンMCMCに代表される計算統計学的手法を用いたベイズ推定がさまざまな応用分野に適用されるようになってきた。とりわけ、コンピューター・ハードウェアの高性能化と使い勝手のよいソフトウェアの普及により、農学・生態学・進化学の分野では最近十年の短期間に急速にこれらのベイズ統計学的手法が浸透している。今回の特別セッション

では、これら生物統計学の分野でいま先導的な研究を進めている若手の研究者に、ベイズ統計学をそれぞれの問題状況で用いるときに生じる理論的問題と実践的問題について話題提供をしていただき、分野を越えて共通する問題点について議論を深める場にしたい。

【演者・演題】

岸野洋久(東京大学)「ベイズ統計手法の応用の現状と展望(仮)」

北門利英(東京海洋大学)「水産資源学におけるベイズモデリング(仮)」

林 武司(農業生物資源研究所)「ベイズ手法を用いた遺伝育種研究(仮)」

田辺晶史(筑波大学)「ベイズ法をもちいた系統進化の解析(仮)」

伊東宏樹(森林総合研究所)「植物生態学とベイジアンMCMC(仮)」

久保拓弥(北海道大学)「集団動態のベイズモデリング(仮)」

6. 特別講演(昨年度学会賞受賞者による特別講演)

5月22日(土) 午後(予定)

演題：Statistics in Medicine

演者：丹後俊郎氏

7. 一般講演の申し込み

以下の分野毎に演題を募集します。

A. 臨床研究・臨床診断学, B. 疫学, C. ゲノム・バイオインフォマティクス, D. 農業・環境・資源, E. 医薬品・医療機器等, F. その他

応募の際には、ご希望される分野名を必ずご指定下さい。分野毎の演題募集には、学会の独自性・特色をより打ち出し、専門性を深めるといふねらいがあります。分野毎に、より踏み込んだ活発な議論を期待しております。会員の皆様の積極的なご発表をお願い致します。

(1) 申し込み方法：

発表者氏名、所属(共同の場合は全員の氏名、所属)、講演題目、連絡先を明記の上、電子メール、ファックスあるいは葉書で下記にお送り下さい。また、Biometric Bulletin への掲載のためにお手数ですが、講演題目、発表者氏名、所属についての英語版も合わせてお送り下さい。

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-6

能楽書林ビル5階

(財)統計情報研究開発センター内

日本計量生物学会事務局

E-mail: biometrics@sinfonica.or.jp,

Fax: 03-3234-7472

HP: <http://www.soc.nii.ac.jp/jbs/index.html>

(2)発表申し込み受付開始 2010年3月8日(月)

(3)発表申し込み締切 2010年3月31日(水)

(4)予稿原稿締切(必着) 2010年4月19日(月)

ご講演を申し込まれた方には予稿原稿執筆要領をお送りします。

8. その他

(1) 年会期間中に日本計量生物学会総会及び学会賞授与式、並びに評議員会を開催します。

(2) 5月20日(木)には応用統計学会年会が本年会と同会場にて開催されます。参加費は正会員、後援学会員 3,000 円、非会員 5,000 円、学生(会員、非会員とも) 1,000 円です。

③ 親子休憩室の設置について

和泉志津恵(企画理事)

2009 年の対面理事会において議論した結果、ご家族で参加される会員の方に優先的にご利用いただく親子休憩室を、2010 年年会より会場内に設置することになりました。小さなお子さんがいらっしゃる会員の方々に対して研究活動を支援し、年会へ参加しやすい環境を整えるのが、この新たな試みの意図です。連合大会の保育室とは異なり、この部屋には保母や保育サービスが付きません。親子休憩室でのお子さんの安全確保のため、親子休憩室では保護者が同伴することを条件とします。利用可能な時間帯は、チュートリアルと年会のプログラムに準じます。なお、応用統計学会にご協力をいただき、応用統計学会年会の期間中も親子休憩室をご利用いただける模様です。準備の都合上、利用をご希望の方は、年会の事前参加申込書中に利用人数をご記入ください。

今回の会場では下記の和室を準備しています。



部屋 1



部屋 2

最後に、年会においてより多くの会員のみなさとお会いできますように願っています。

④ 2010 年度日本計量生物学会賞および功労賞候補推薦のお願い

上坂浩之(学会賞担当理事)

日本計量生物学会は、日本計量生物学会賞、功労賞および奨励賞の 3 つの賞を授与しています。日本計量生物学会賞と功労賞の受賞候補者は会員の皆様により推薦いただき学会賞選定委員会にて受賞者を推薦し、日本計量生物学会賞受賞者は理事会の承認により、また功労賞受賞者は総会の承認により決定されます。また奨励賞は日本計量生物学会誌、

Biometrics, Journal of Agricultural, Biological, and Environmental Statistics(JABES)等に掲載された論文の著者(単著でなくても第一著者かそれに準ずる者)で原則として 40 歳未満の本学会の正会員または学生会員から選定委員会が候補者を選出し、理事会の承認にて受賞者が決定されます。今回は、会員の皆様には日本計量生物学会賞および功労賞の推薦をお願いいたします。自薦、他薦いずれも受け付けます。学会賞および功労賞の対象者は以下の通りです。

日本計量生物学会賞:優れた原著、総説、著書を発表した正会員

功労賞:会長経験者またはそれに準ずる学会活動を行った者、顕著な研究成果を挙げた者、顕著な教育実績を上げた者

下記の様式により日本計量生物学会賞、功労賞いずれも学会賞選定委員会宛にお送りください。受賞者の発表と表彰は 5 月の日本計量生物学会総会で行います。いずれの賞もニュースレターなどで受賞理由を公表いたします(推薦者は非公表です)。

推薦書の様式:A4版1枚に、日本計量生物学会賞または功労賞推薦書と14ポイントで書き、本文は10.5ポイントで以下の内容をご記入下さい。資料の添付等は自由です。

- 1) 被推薦者氏名、所属、連絡先(住所、電話、e-mail)
- 2) 推薦理由
- 3) 推薦期日
- 4) 推薦者氏名(複数の場合は全員)
- 5) 推薦者(複数の場合は代表者)の所属および連絡先(住所、電話、e-mail)

推薦締め切り期日:平成 22 年 3 月 31 日(必着)

推薦書送付先:〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 3-6 能楽書林ビル 5 階

(財)統計情報研究開発センター内

日本計量生物学会事務局 学会賞選定委員会

⑤ シリーズ: 計量生物学の未来に向けて

本号より新シリーズが始まります。若手～中堅の会員の方々を中心に普段の研究や教育などをおとして計量生物学への思いなどを語っていただきます。

5.1 計量生物学の科学に対する貢献と今後の発展について考える

伊藤陽一(北海道大学)

今年の 2 月 1 日に、復刊ドットコムで、C.R.ラオの「統計学とは何か」の復刊が決定したと知りました。昔買って持っていたことを思いだし見てみると、本には 1998 年 8 月 26 日に購入というメモ書きがあり、実に 11 年以上前に買っていたことになりました。読み返してみると、10 年以上前に書かれた本という古さはなく、今でも十分に役に立つ示唆に富んだ本でした。内容を全く覚えていなかったのが、当時の自分は全く読みこなせていなかったのだと痛感してしまいます。

ラオの統計学に関する主張は明解です。それは、20 世紀初めに起こった統計学の発展によって、帰納的推論における不確かさが数量化され、帰納的推論がより正確になり、我々の思考に大きな躍進がもたらされたというものです(p.126)。一般に、科学的方法是は演繹的推論と帰納的推論を含みます。演繹的推論とは与えられた前提から結果を導く過程で、紀元前 3 世紀のギリシア人によって完成され、数学において体系化された思考

過程です。たとえば、前提として「A ならば B である」と「A である」を真とすると、結論として「B である」が導かれます。一方、帰納的推論とは、不完全な前提から議論を始めて決定を行うもので、人類の創始期から行われてきたものです。たとえば、前提として「a1 は P である」と「a2 は P である」を真としたときに、結論として「全ての a は P である」とするものです。これは有限個の観察からの一般化を意味しています。直感的に明らかなように、このような帰納的推論は不確かであり、誤りを含みうるため、科学的な方法論としては認められていなかったのです。

デイヴィッド・サルツブルグ著「統計学を拓いた異才たち」によれば、カール・ピアソンは、ダーウィンの進化論において説かれた適者生存による新種の発生を証明するべく、鳥のくちばしの長さなど、ある生物種の特徴量を測定し、その特徴量の分布の変化を見ようとしたようです。そのために 1901 年に Biometrika を創刊しています。生物が本質的にバラツキを有していると捉えられたのはこの頃からであり、この観点に立って計量生物学が創始されました。その後、フィッシャーは、バラツキを越えた違いがあるかどうかを検証する有意性検定を、不確かさの定量化手法として整備しました。これによって有限個の観察から一般化を行うという帰納的推論に伴う不確かさが定量化され、統計的手法を伴った帰納的推論が科学的な方法論として認められました。計量生物学の創始期の成果によって、上述したような科学的思考の変化が生じたことは特筆に値するものと思います。

計量生物学は、その発展の方向性として、諸々の有用な概念を確立し、その測定方法を開発してきたように思います。ピアソンとフィッシャーの違いを考えると、ピアソンが生物の特徴量の分布そのものに関心があったのに対し、フィッシャーは、特徴量の平均といった「統計量」の分布に関心があったのではないかと思います。特徴量の平均の分布という概念は、特徴量そのものの分布よりも、より概念的なものです。作物の収量に影響を与える因子を探索することに関心がある場合、作物の収量を「平均収量」という概念として捉えることは必須であり、目的そのものと言えます。また、医学・薬学の分野におけるランダム化臨床試験の群間差を求めることは、概念的には、ある対象にある治療法を割り付けた場合の結果と、もう一方の治療法を割り付けた場合の結果の差として定義される因果効果の、対象集団全体における平均値を確率的に求めていることに等しいと考えられます。この「因果効果の平均値」という概念は、非常に概念的で測定が困難なものです。ランダム化という方法によって初めて、「因果効果の平均値」という概念が測定可能になります。その他にも、観察研究における傾向スコア、競合リスク、代替指標の代替性(Surrogacy)など、数々の有用な概念が確立され、その測定方法が議論されてきました。今後も、この流れは続いていくものと思います。

もうひとつの方向性としては、測定の効率性の追及が挙げられます。疫学の分野では、同じ目的を達成するために、より効率的なデザインが次々と提案されています。例えば、コホート内ケース・コントロール研究やケース・コホート研究は、コホートにおける全てのコントロールを調べることなく、目的とするハザード比やリスク比を推定できるデザインであり、測定費用の高い遺伝子研究において積極的に利用されています。

計量生物学の未来において、何がなされるでしょうか。おそらくは、まだ概念化されていない領域が積極的に概念化され、その測定方法が開発され、定量化され、また効率的に測定するためのデザインが考案されることでしょう。薬剤の開発という場面で、まだ完全には概念化されていない領域がないかと考えてみると、開発全体における複数の臨床試験をプロセスと捉えた場合のプロセスの質であるとか、その開発を行う組織の質などが挙げられるかと思います。このような人間の活動の様々な側面を概念化し、定量化していくことによって、現状を客観的に捉え、改善していくことができるように思います。

しかし、気を付けなくてはならないこともあります。概念の定量化と改善を推し進めると、効率性を優先して人間性を軽視することになるかもしれません。ラオは「統計学とは何か」の中で以下のように述べています (p.185)。

- ・ 進歩は公平で持続的であるべきである。
- ・ 生活圏には決して致命的な損傷を与えるべきではない。
- ・ いかなる道徳的汚染(または人間の価値の低落)もあってはならない。

統計学を研究し、教育によって人々に広める立場にある者として、このラオの言葉はとても大切であると思っています。定量化によって人間を科学の道具にするべきではなく、科学を人間の道具にするべきで、そのために統計学は人間にとって最大の武器になると思います。全ての人が、読み書きと同じ程度に、統計的な考え方を身に付けたとき、統計学は社会をもっと良くするために最大限の力を発揮してくれることと思います。計量生物学の発展と教育普及を通して、微力ながら、そのような社会を目指していきたいと思っています。

参考文献

C.R. ラオ著、藤越康祝、柳井晴夫、田栗正章 共訳。統計学とは何か。丸善。1993。
デイヴィッド・サルツブルグ著、竹内恵行、熊谷悦生 訳。統計学を拓いた異才たち。日本経済新聞社。2006。

5.2 計量生物学の発展に貢献するために

蔡志紅(日本イーライリリー株式会社)

「計量生物学の未来に向けて」というテーマで会報担当の方から執筆依頼があったのは、12 月の中旬であったように思います。製薬会社に勤務し、生物統計学の研究と実践の両方を経験できる機会を得たものの、現在に至るまでに「計量生物学の未来に向けて」何をしたらよいのか、考えたことすらありませんでした。私のような駆け出しの生物統計家が考えるには大きすぎるテーマのように思うのですが、自分自身のつたない経験を踏まえて、計量生物学の発展に貢献する上で生物統計家として何が必要なのかについて、私の考えを述べてみたいと思います。

学術的な立場から見た場合、計量生物学は、現在直面している医学・生物学的問題を解決することを視野に入れ、かつ将来において遭遇すると思われる実務的問題にも適用可能で一般的な方法論を開発するために、医学・生物学と統計科学を融合した異分野横断的な学問・研究分野である、と私は考えています。すなわち、生物統計家として、将来においても起こりそうにない医学・生物学的問題をどう解決するかといった、いわゆる机上の空論を議論するのは適切ではなく、目の前のデータだけがうまく解析できればよいといった、その場しのぎの統計解析法を開発すればよいというわけでもありません。また、最近の学術誌を見ればわかるように、近年の医学・生物学は急速に発展しており、それにともなって生物統計学に関する新たな問題も次々と提起されています。このような状況の中で、生物統計家は最新の研究動向をキャッチアップすることや、忘ってはならず、人の生命に関わる新たな問題に挑戦することなく現状に甘んじたまま過ごすことも許されるわけではありません。

一方、企業に勤務する生物統計家の立場から考えた場合、私たちの使命は、優れた治療薬を開発し一日でも早く患者に届けることだと思います。この目的を達成するために、近年では、国際共同試験・世界同時開発が主流となりつつあります。これまでの日本の臨床試験は、海外で実施された臨床試験を参考にしながら実施されることがしばしばありました。しかし、これから実施される国際共同試験においては、日本の生物統

計家は、開発戦略の立案から統計解析法の提案・解析結果の解釈にいたるまでの一連の作業を、海外の臨床家・生物統計家とともに取り組むことが不可欠となります。また、日本の生物統計家が国際共同試験・世界同時開発においてイニシアチブをとるために、海外の臨床家・生物統計家に対して自分の意見がはっきり言えるように実力をつけておくことが重要です。この場合には、新しい統計解析法の開発・理解・活用や疾病に関する知識だけでは明らかに不十分であり、コミュニケーションスキルやリーダーシップスキルの向上も重要になると思います。

このように考えてみると、最先端の情報や知識を効率よく入手しながらも、それと同時に医療現場で何が問題になっているかを適切に把握するために、臨床家と生物統計家との柔軟で緩やかな協力関係を構築することが重要なのではないかと思います。また、浮世離れた考え方や近視眼的な統計解析法の開発を避けながら、計量生物学の研究を進展させ、そして実践していくために、生物統計家は統計学・医学・生物学をただ知っていればよいというのは適切ではなく、統計学に関する知識と医学・生物学に関する知識を有機的に結びつけておくことも不可欠ではないかと思います。しかし、残念ながら、これらの学問を体系的に学べる環境が日本に多くあるわけではありません。日本の計量生物学を発展させるためにも、学術的な側面としては、計量生物学を専門とする研究・教育機関を多く設立することが必要であり、そして企業の立場としては、国際的な視野にたって開発戦略の立案と試験デザインに参画できる生物統計家を育成するために、社員が計量生物学関連の研究・教育機関で学びかつ議論できるような環境を企業内制度として確立することが必要なのだと思います。

⑥ 日本計量生物学会ホームページのリニューアルについて

大橋靖雄, 浜田知久馬 (庶務担当理事)

2月の初めに当学会のHPを全面的にリニューアル致しました。今回は専門の業者に依頼をしたので、ずいぶん見やすくなったと思います。一度アクセスしてみて、どのように変更されたかをご確認ください。

(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jbs/index.html>)

またHPについてご意見、不具合等がありましたら事務局までご連絡いただけたらと思います。よろしく願いいたします。

⑦ シニア会員の制度設立について

菅波秀規, 森田智視(会計担当理事)

大橋靖雄, 浜田知久馬(庶務担当理事)

2011年度からシニア会員の制度を導入することになりました。この制度は計量生物学会に10年以上所属した会員(国際会員)を対象に、退職後の国際会費\$60.0を半額の\$30.0にする制度です。(会員としての特典は正会員と同じです。)

この制度の利用を希望される方は、次の事項を記載の上、事務局宛にシニア会員の申請を行ってください。特定のフォーマットはありませんので、必要な情報を記載してください。簡単な審査の上、可否を連絡いたします。(ご不明の点などありましたら、事務局まで個別にご相談ください)

氏名

連絡先 住所

E-mail アドレス(利用可能な場合)

計量生物学会の所属年数

退職前の最終勤務先

退職年

⑧ 日本計量生物学会 2009 年度理事会議事録

大橋靖雄, 浜田知久馬 (庶務担当理事)

○2010 年第 1 回対面理事会議事録

日時：2010 年 1 月 19 日 (火) 17:00～19:00

会場：東京大学 医学系研究科教育研究棟 13 階 第 7 セミナ一室

出席：佐藤, 和泉, 大橋, 巖, 酒井, 菅波, 丹後, 浜田, 松井, 松山, 三中, 山岡

欠席：上坂 (委任状), 森田, 大森 (委任状), 服部 (委任状), 三輪 (監事), 森川 (監事)

議事：

1. 庶務理事からの報告

庶務担当 浜田理事より、会員数と名簿作成の進行状況の報告があった。

名簿への自宅情報掲載有無が不明となっている会員に対し再確認を行っているが、未回答のままの会員の対応については、名簿に自宅情報を掲載しないことにし、名簿自体にもその旨を記述することにした。

今年度から本部で設けられたシニア会員の制度については、2 月発行のニューズレターと会費請求の際にアナウンスし、自己申告した会員については、来年度からその会費を変更することが提案され了承された。

国際会費の換算額は、一般国際会員の換算額決定と同時期に検討することになった。

会費の長期未納者については、再三の確認にも返答がないため、会則第 13 条 1 項に基づき退会処分とすることになった。

2. 企画担当理事からの報告

企画担当 三中理事より報告がなされた。

(1) 2010 年度年会およびチュートリアル

2010 年度は、5 月 21 日、22 日に、統計数理研究所 (立川) での開催を予定しているが、全期間 (応用統計学会年会、チュートリアル、日本計量生物学会年会) にわたる、会場の確認・予約、看板等の準備、アルバイトの確保については、日本計量生物学会が担当することが報告された。

チュートリアル、特別セッション、特別講演の各講演についての予定が報告され、また一般講演、参加の申し込みスケジュールが提示された。

チュートリアルに関しては、応用統計学会と共催し、テーマ及び講師の選定、資料の準備、アルバイト等の人員確保および指示・監督、会場準備、その他当日の運営にかかわるすべてを、日本計量生物学会と応用統計学会が 1 年毎に交互に担当することとし、2010 年は日本計量生物学会が担当となり、具体的な運営方法、申し込み方法、会計の方法について、応用統計学会と協議した結果の途中報告がなされた。

また、5 月 21 日 (金) の昼に理事会、夕方に評議員会、22 日の昼に各賞表彰式と総会を行う予定とした。

関連して、和泉理事から統計数理研究所での親子休憩室

の下見の結果が報告され、会期中アルバイトを一名配置した親子休憩室を設置することになった。続いて大森理事から年会会場の下見の結果が報告され、会場については、参加申し込みが多い場合には、別会議室での中継も検討すること、また、会場周辺に昼食場所がないため、何らかの工夫を検討することとした。更に応用統計学会と合同で会場の下見をするようになった。

(2) 2010 年連合大会チュートリアル

自然科学系と社会科学系で方法論的話題を2つ選ぶという方針だけが決まっており、より具体的なアイデアがあれば歓迎するとのことで、日本計量生物学会としては計算機統計学の話を提案する形で動いていることが報告された。

(3) 2010 年連合大会の計量生物学シンポジウム

企画セッションとして、奨励賞受賞者講演と「因果推論の最近の発展」を検討することになった。

(4) 計量生物セミナー

テーマを「医薬品のグローバル開発（仮題）」とし、国際共同治験を中心に、Modeling & simulation の話を含めるという方向で、行うことが報告された。時期は IBC、臨床薬理学会と重ならないように 11 月頃を予定していることが報告された。

(5) 計量生物学講演会

山岡理事から、2010 年 1 月 19 日（火）15:00-16:30 に、東京大学薬学系総合研究棟 2F にて、Professor Emmanuel Lesaffre を講演者に迎えて 2010 年第 1 回計量生物学講演会が開催され、21 名の参加者があったことが報告された。

3. IBC2012 について

LOC 委員長 丹後理事から、26 回国際計量生物学会議の学会議との共同主催申請に関して、申請資格が認められたとの報告がなされた。また国際会議主催等検討分科会によるヒアリング審査が 2010 年 2 月 9 日（火）に日本学術会議 会議室にて実施されることになり、佐藤会長、大橋理事が出席して説明を行うことになった。

4. 編集委員会報告

編集委員長 松井理事から、「計量生物学」30 巻 2 号が 2009 年 12 月末日付けで発行されたことが報告された。また現在の投稿状況、2010 年の予定、電子ジャーナル化の進行状況が報告された。

5. 会報について

会報担当 和泉理事から 3 月発行予定のニュースレター 102 号の進捗状況が報告された。

6. 会計報告

会計担当、菅波理事から、2009 年度決算報告（案）、2010 年度予算（案）について報告がなされた。

2009 年度決算は 5 月に予定されていた計量生物学会年会のインフルエンザによる中止に伴い、予算より収入が減少したが、最終的には黒字収支となったことが報告された。その要因は、円高により本部送金額が予算より減少し為替差益があったこと、ホームページ作成費、名簿作成費の一部の支払いが次年度になったことであることが報告された。

決算については、2010 年 1 月 15 日に監事による監査を受けており、問題はなかったとの報告がされた。2009 年度決算については、一部の項目を再確認するという条件付きで、承認された。

2010 年度予算については、ブラジルで開催される IBC の旅費補助を予算に盛り込み、各理事と調整を行い、改訂後、3 月の理事会で再検討することになった。

7. 学会ホームページについて

浜田理事から報告がなされた。エムシンク社で作成中の学会ホームページについては、現在 WEB 上でテストページが参照可能であり、各理事で確認の上、意見を 1 月中旬に浜田理事に連絡することになった。

8. その他

佐藤会長より学会賞・功労賞推薦依頼があった。また松井理事から、奨励賞の検討委員会を組織し、候補者を推薦の上、4 月のメール理事会で審議する予定であることが報告された。

⑨ 2009 年第 2 回計量生物学講演会、特別セッション・チュートリアルセミナー報告

和泉志津恵、上坂浩之、大森崇、服部聡、三中信宏(企画担当理事)

2009 年度の 5 月の年会がインフルエンザの影響で延期になったことに伴い、そのときに予定されていた企画セッション・チュートリアルセミナーを 11 月 28 日に京都大学で行いました。ちょうどこの時期に Nicholas P. Jewell (University of California) 氏が来日されたので、前日の 11 月 27 日にキャンパスプラザ京都で第 2 回計量生物学講演会を開催しました。

9.1 2009 年第 2 回計量生物学講演会

11 月 27 日の Nicholas P. Jewell 氏の講演は、「Causal Inference for RCTs: Accommodating (i) Secondary Interventions, and (ii) Treatment-Related Side Effects」とタイトルで、臨床試験において中間変数となるものが考えられる場合について、因果モデルを用いてどのように効果の推定を行うという内容でした。途中で佐藤会長の解説も行われ、因果推論にあまりなじみがない方も効果の推定において何を考えようとしているのかわかる内容になったのではないかと思います。



2009 年第 2 回計量生物学講演会講演中の Jewell 氏

9.2 特別セッション

11 月 28 日は、午前中に応用統計学会のチュートリアルが行われ、午後から計量生物学会の特別セッション「臨床試験におけるサロゲートエンドポイントの評価：臨床的視

点と統計的視点」が、続いて江口真透氏（統計数理研究所）によるチュートリアルセミナー「ゲノムデータ・オミックスデータを解析するための新しい統計方法と機械学習の方法」が開催されました。

臨床試験におけるサロゲートエンドポイントの統計的評価に関する多くの研究が行われ、様々な統計的規準が提案されています。このセッションでは、手良向聡氏（京都大）の座長のもと、サロゲートエンドポイント評価の現状のレビューに続いて、二つの臨床試験の事例が紹介されました。それぞれの事例で、臨床家からの臨床的視点の提示があり、それ応える形で統計家から統計的視点による解説という形でサロゲートエンドポイントの評価の仕方について議論がされました。

はじめにオーガナイザーである手良向聡氏、松井茂之氏（統計数理研究所）による趣旨の説明の後、イントロダクションとして、統計的方法のオーバービューとして竹村徹（帝人ファーマ株式会社）から Prentice の基準と 3 つの評価方法の解説がありました。その後、前立腺がん試験における前立腺特異抗原 (PSA) の役割に関して、臨床的立場として樋之津史郎氏（京都大）から PSA の解説と最近の臨床研究の紹介がなされました。統計の立場として田中史朗氏（京都大）からは、この問題に対する Principal stratification の方法の解説と適用結果が示されました。事故のため遅れてこられた折笠秀樹氏（富山大）が最近の文献等の紹介を含めて、サロゲートエンドポイントの必要性に関してお話をされた後、胃がん術後療法の評価における全生存期間に対する無病生存期間の代替性について、臨床的立場として坂本純一氏（名古屋大）がサロゲートエンドポイントの必要性とご自身もかかわっている国際的な臨床研究 Global Advanced/Adjuvant Stomach Tumor Research through International Collaboration の概要を、統計の立場として同じくこの研究に携わっている大庭幸治氏（京都大）からのメタ・アナリシスを用いた解析の解説と解析結果が示されました。

9.3 チュートリアルセミナー

江口真透氏は、高次元・小標本データの解析方法について、現況の幾つかのアプローチの紹介と、それらの統計的性能の限界や問題点などが指摘されました。I 部ではパイオインフォマテクスにおけるデータ解析の基本的課題である「 $p \gg n$ 問題」としてマイクロアレイを特徴ベクトルとする治療効果予測についての事例の説明と、いくつかの解析方法について説明がありました。II 部ではスパース学習として注目されているアダプスト・アルゴリズムに関して、統計的な解釈やその欠点の解説とともに、幾つかのブースティングについての説明がなされました。



チュートリアルセミナー講演中の江口氏

⑩ 2010 年第1回日本計量生物学会講演会報告 丹後俊郎 (国立保健医療科学院)

2010 年第1回計量生物学講演会「Statistical Modeling in Oral Health Research」が下記の要領で開催された。

司会：丹後俊郎 (国立保健医療科学院)

講演タイトル：Statistical Modeling in Oral Health Research

講演者：Professor Emmanuel Lesaffre (Erasmus University Rotterdam, Erasmus Medical Centre, the Netherlands)

日時：2010 年 1 月 19 日 (火) 15:00-16:30

会場：東京大学大学院薬学系研究科・総合研究棟2F講堂

共催：東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学講座、国立保健医療科学院技術評価部

参加費：無料

本特別講演では、2009 年に出版された「Statistical and Methodological Aspects of Oral Health Research (Statistics in Practice)」の著者の一人である Emmanuel Lesaffre 教授 (Erasmus University Rotterdam, the Netherlands) を講師にお招きした。講演の内容は、口腔保健研究における経時データの解析について、データの特徴を具体的な研究からの解説と、それらの特徴に応じた経時データ解析方法に関する演者の最近の研究について紹介をしていただいた。参加者は 22 名と少なかったが、口腔保健分野における生物統計学的研究の取り組み方についての興味深い話題の提供と今後の発展の可能性が示唆された。



2010 年第1回日本計量生物学会講演会講演中の Lesaffre 氏

⑪ East Asia Regional Biometric Conference 2010 報告

2 月 12～13 日にインドにおいて 2 回目の East Asia Regional Biometric Conference (EAR-BC) が開催されました。プログラムは以下のとおりです。

2 月 12 日 (金)

08:00 - 09:00 Registration

09:00 - 10:00 Opening Ceremony

10:00 - 10:30 Tea Break

10:30 - 11:30 Symposium - I:

Recent advances in epidemiologic research

1) Causal Inference in the Exposed

2) Space-time scan statistics for outbreak detection

11:30 - 13:00 Paper Presentations - I:

Statistics in Epidemiology

1. Analysis of stratified contingency tables via information criteria
 2. Assignment of grouped exposure levels for trend estimation from summarized data
 3. Risk Trajectories of Locomotor Disability of the Aging Indian
 4. Co-infections in HIV infected children of Western region of Nepal: A hospital based retrospective study
 5. Randomized Response in Multiplicity Sampling for studying the Rare and Sensitive Trait of a population
 6. Morbidity Prevalence in Slums of a Metropolitan city of India
 7. A case control study on reproductive factors and risk of breast cancer
 8. Reporting results of diagnostic tests in the absence of gold standard: A review
- 13:00 – 14:00 Lunch Break
- 14:00 – 15:00 Symposium – II:
Statistics in Clinical Trials
- 1) Cure Models for Recurrent Event Data
 - 2) Statistical Issues in Randomized Trials
- 15:00 – 16:00 Paper Presentation – II:
Statistics in Clinical Trials
1. Standardized Reporting of Ayurvedic Clinical Trials
 2. A comprehensive set of nonparametric survival techniques for clinical trial TB data
 3. Statistical Methods to Analyse Ordinal Categorical Data Arising from the Clinical Trial of Drugs from the Pharmaceutical Industry
 4. New composite hypothesis and statistical tests in randomized clinical trial where two time to event data are primary endpoints
 5. Restricted Maximum Likelihood Estimation of Treatment Effect Adjusting for Random Pretreatment Baselines in Randomized Controlled Trials
- 16:00 – 16:30 Tea Break (Poster Presentations)
1. Prediction of the toxicity score by in vitro test: An application of Bayesian statistical calibration
 2. The design of three-arm non-inferiority trial including placebo with assay sensitivity
 3. A sensitivity analysis using multiple imputation method for meta-analysis: the effects of lifestyle modification on metabolic syndrome.
 4. On An Analytical Procedure On Pest Surveillance
 5. Estimating survival models as structural equation models
- 16:30 – 17:30 Paper Presentation – III:
Statistics in Agriculture, Environment & Genetics
1. The Role of Biometry in Developing Capacity of Agricultural Scientific Research
 2. Application of Nonparametric Modelling in Agriculture
 3. Effect of Noise Pollution in Varanasi City on Physical and Mental Health
 4. Phenotypic grouping based on Alcohol Use and Psychiatric Comorbidity
 5. Analysis of correlated clustered data from families predisposed for CAD
- 2 月 13 日(土)
- 09:00 – 10:00 Symposium – III :
Statistical Modeling and Applications
- 1) Ranked Set Sampling and its Applications
 - 2) Generalized Inverse: Matrix Approach to Handle Nonunique Solution of a Linear System
- 10:00 – 10:30 Tea Break
- 10:30 – 13:00 Paper Presentation – IV:
Bayesian Statistics & Data Mining Techniques
1. Bayesian And Hierarchical Bayesian Analysis Of Some Response Time Models For Carcinogenic Studies
 2. Bayesian meta-analysis, with application to clinical trials TB data.
 3. Bayesian Credibility Models for General Insurance and Its Applications
 4. A Bayesian Approach in Agreement Analysis: An Application in Artemisinin Combination Therapies (ACTs) for Malaria Patients.
 5. Data Mining Using Decision Tree Algorithms
 6. Performance of different missing data analysis methods and their effect on distributional properties: a simulation study
- 13:00 – 14:00 Lunch Break
- 14:00 – 15:30 Paper Presentations – V:
Statistical Modeling and Applications
1. Analysis of Nonlinear Dynamics of the Long Term Blood Pressure Regulation using Modified Parameter Tuning Technique
 2. Model spatial dependence of tuberculosis using Moran's I technique
 3. Prediction models for adverse drug reactions and associated cost involved in hospitalized patients.
 4. The Zero-inflated Generalized Poisson Model and the decayed, missing and filled teeth (DMFT) index in dental epidemiology
 5. Performance of different similarity and distance measures for binary data in cluster analysis.
 6. Quasi-independence models for incomplete multidimensional contingency table for assessment of association between variables.
 7. Household and environment factors associated with asthma among Indian women: A multilevel approach
 8. Comparing groups in a pre and post test design: When t-test and ANCOVA produce different results
 9. Determinants of poor control of diabetes mellitus – A systematic review
- 15:30 – 16:00 Tea Break
- 16:00 – 17:00 Closing Ceremony

11.1 佐藤俊哉(京都大学)

インドのマニパル大学で開催された East Asia Regional Biometric Conference (EAR-BC) 2010 に参加してきました。インドまでは飛行機の便が 1 日おきにしかないのと乗継が悪く、行きは途中で一泊しないといけないのですが、日本からは 11 名の参加者で、残念ながら韓国、中国の参加者はゼロでしたが、IBS 前会長の Andrew Mead 先生、IBS 庶務理事 Ashwini Mathur 先生もいらして日本とインド支部間の交流を深めることができました。以下はその報告です。

10 日(水) ムンバイまでの長い日

諸般の事情で今回は成田からのフライトと相成ったが、月曜・火曜と東京で会議があり、しかも火曜午後は神戸での IBC 開催を日本学術会議と共催にいただくためのヒアリングがあり、国内組織委員会委員長の丹後先生、庶務の山岡先生は保健医療科学院から参加するみなさんと一足先にインドに旅立っているため、わたしと大橋先生とでヒアリングに。うまくいくといいのだが。

さて今回は京大の大森先生、久留米大の服部先生とおなじスケジュール。10 日朝の全日空ムンバイ行きは 10 時 10 分発なので、5 時起きで成田に 8 時過ぎに到着。さっさと出国審査を受けてゲートにいくとそこには服部先生が。朝一番の飛行機で来たというので、「えっ、この便は福岡に止まるんだよ」といったらだいぶショックを受けていた。大森先生も合流して、搭乗するとこれがまたとってももちっちゃい飛行機で、「これでインドまで飛べるの?」という感じ。ところが機内に入るとエコノミーも国内線のプレミアシート並みにゆったりしていて、これは大助かり。やっぱり福岡で一旦降ろされ、再び搭乗して 13 時 10 分に出発。ほぼ予定通りにムンバイ着。やはり暑い。

空港のそばのホテルにチェックインする。久留米大の柳川先生もシンガポール経由で夜遅くムンバイに着くそうで、明日は 4 人で会場に移動する。

11 日(木) ムンバイで迎える建国記念の日

11 時 30 分に国内線のターミナルに行く車が出るということで 4 人で待っていると、これがまたいつになってもこない。柳川先生が車を煮やしてベルボーイに文句をいうと、すぐに車が 2 台で来たのだが、この調子はこれからずっと続く。

Jet Airways のチェックインがまたこんでいて、おとなしく待つこと 20 分、ようやくゲートにたどり着く。マンガロール便は 15 分くらい遅れて 13 時 20 分ごろ。それでもなんとか飛び立った。マンガロール空港には大学から迎えに来ているというので、探すといいた、「Toshiya Sato」と「Takashi Yanagawa」と書かれた紙を持っているので、サンキューサンキューと行こうとすると、「先生、こっちにも名前があります」。なんとそこには 4 名全員の名前とマニパル大学と書いてあるではないか。確認すると、先のふたりはホテルから来たとのこと。ありやうや、ホテルからのお迎えはキャンセルしたんだけどな、などと言っていると、どこからともなく IBS 庶務理事の Ashwini Mathur 先生があらわれ、ホテルの人に事情を説明して事なきをえる。

アシュウィニさんも 5 分前に着いたとのこと、ほかにもインドの参加者が合流して合計 8 名を載せたバスが一路マニパルに。バスはごとごとと田舎道を 1 時間半ひた走り走り、クラクションを鳴らしに鳴らし、4 時半過ぎにマニパル着。ホテルは会場のそばの Fortune Inn Valley View。

これからカレーを食べ続けることになるのだが、今日は絶対カレーだということで、晩はホテルのレストランで 4 人でカレーを頼む。途中、アシュウィニさんがマニパル大学の今回の会議の事務局を務める Sreekumaran Nair 先生さんを連れてあらわれ、明日の予定などを説明する。明日、9 時から Opening Ceremony があり、わたしは Releasing the Souvenir なる役目を果たすことになっているのであるが、なにをするのかさっぱりわ

からない。朝 8 時 50 分に車が迎えに来てくれるとのこと。

まだ明日の講演の発表練習もしていないのだが、シャワーを浴びたらもうすっかりやる気がなくなり寝る。

12 日(金) 日本人の恥

無論朝からカレーである。柳川先生は「ちょっとだけ会議にでて、遊びに行こうと思っていたがどこにもいくところがない」とのこと。(柳川先生の名誉のために書いておくが、さぼったのは 2 日目の午後だけだった。)日本代表として今日のセレモニーに遅刻するわけには行かないので、8 時 40 分にロビーに降りて車を待つ。8 時 50 分を過ぎても来ない。ロビーで聞くと「今来る」というのだが、そうこうするうちに 9 時になってしまった。もう一度ロビーで聞くとなにやらどこぞに電話して「2 分以内に来る」とのこと。どうなっているのかわからないまま、まあいいか、とすでにインドに適應し車を待つ。ようやく車が来たが、会場の場所を教えてもらえば歩いてすぐだったのでなにをしているのか。

到着するとセレモニーの出席者の紹介はすでに始まっていて、ぼつんとひとつ空いたひな壇の席に通されるが、カッコ悪いっらない。武士なら切腹ものである。セレモニーがはじまったので、「Releasing the Souvenir」なる大役をつつがなく果たすために、となりのアシュウィニさんに小声で、「なにしたいの?」と聞くと、「Souvenir の包みを開けるだけだ」というので一安心し、そうこうしているうちにもセレモニーは進む。ランプの点灯式がこんな感じであった。



ランプの点灯式、左 2 人目からマニパル大学の Dr. G.K. Prabhu、インド支部会長の Dr. V.G. Kaliaperumal、IBS 前会長 Andrew Mead、マニパル大学 Chancellor Dr. H.S. Ballal、IBS 庶務理事 Dr. Ashwini Mathur、わたし、インド支部庶務理事 Dr. P. Venkatesan、マニパル大学 Department of Statistics の Dr. N. Sreekumaran Nair

マニパル大学の方たちのスピーチ、アンドリュー前会長のスピーチのあと、きらびやかな紙にリボンがかかった包みがわたしの前に運ばれてきたので、おごそかにリボンをほどき、包みはアシュウィニさんと一緒にびりびり破り、でてきたお土産(予稿集だった)を高く掲げてみなに見せ、ひな壇の方たちに手渡してぶじ終了する。

最後にひな壇にいた人たち全員にプレゼントが贈られ驚くが、この驚きはこれからまだまだ続く。20 分ほど遅れてようやくセレモニーが終わり(誰のせいだか)、今度は「Recent Advances in Epidemiologic Research」というシンポジウムでわたしと丹後先生が招待講演者として話さないといけないのだが、次のセッションがいつから始まるのかわからない。しかし、もう驚かない。

なんだかばたばたしているうちにセッション開始。座長は 20 分に 1 回、25 分でもう 1 回ベルが鳴る、30 分で終了と言っていたのにベルは鳴らなかった。まあだいたい時間内に終わら

せる。丹後先生の講演はちょっと時間が足りず終了。自分の講演は終わっていたので安心していたら、司会が「Dr. Sato, Dr. Sato」と名前を呼んでいるのでなにかと思ったら、座長から招待講演者にプレゼントが渡されるような。もちろん丹後先生にも渡され、今度は座長にインド支部の会長からプレゼントが贈られた。

続けて一般口演。これは90分に8人のスピーカーというすさまじいもので、講演8分討論2分というしろもの。服部さん、保健医療科学院の高橋さんの講演は時間の関係で質問もなく終わったが、次の講演で柳川先生が質問したところ、なにかがはじけたようにフロアからの質問が始まってしまい、欠席者がいたにも関わらず、予定時間をオーバーして終了した。お昼は学生食堂の上でブッフェ。やっぱりカレー（あたりまえか）。

さて午後のシンポジウムでは司会なので、ポスターを貼る大森先生と早めに会場に戻る。午後のセッションは2つめのシンポジウムでMangalore大学のAruna Rao先生の再発事象の治療モデルと、All India Institute of Medical ScienceのR.M. Pandey先生のクラスターランダム化試験のレビュー。セッションが終わると、司会が演者にプレゼントをわたし、インドの方から司会の2人にプレゼントがわたされる。これで今日3つめのプレゼントである。

次のセッションは丹後先生とインドの方が司会をして、トップはアシュウィニさんなのだが、パソコンの接続がうまくいかず、次の演者と交代。でまたまたアシュウィニさんの番となるが、やっぱりスライドがうまく写らない。フロアから、「スライドなしでやれ」と野次が飛び、なんとアシュウィニさんほんとにスライド抜きで10分以上漫談をした。このあと、科学院の西川さん、塩野義の長谷川さんと講演が続いたが、なんといっても10分で終わりのので苦労していた。

夜は7時半からわれわれの泊まっているホテルでディナー、7時から学生が芸をするからきてね、とのこと。7時半前にディナー会場に行くと、すでに10人くらい来ていたが、例によってはじまる気配はなく、7時半を過ぎてもまったく始まらない。しばらくしてようやく、学生がダンスをします、とアナウンスがあり、なにがはじまるのかと思ったら、マニパル大学の女性の学生がかなり本格的なインドのダンスを披露したのでびっくり。服部先生と「神戸のIBCまでに学生にダンスを教えないといけないか」ということに。ダンスは4セッションありどれもけっこうすごかった。その後ディナーがはじまり、料理は懲りずにカレー。

アシュウィニさんが「俺は踊るぞー、みんな踊れ」と言っているが無視。カレーを2種類、緑色のカテッジチーズのカレー、チキンカレーとライスを食べる。そのうちほんとにアシュウィニさんが舞台上がって、「アンドリュー、アンドリュー、アンドリュー」と叫んでおり、アンドリュー前会長も無視。そのうちに「カモン シュン（←わたしのこと）」。アンドリューと同様無視していたら、「じゃあジャバーニーズリージョンから誰かひとりでもいいから舞台にあがれ」と言い出したので、会長としては会員に迷惑をかけるわけにはいかず、覚悟を決めて舞台上がる。

アシュウィニさん大喜びで、女子学生さんたちも無理やり舞台上がらせ、狂ったように踊りだす。そうこうするうちにアンドリュー前会長も諦めて舞台上がった。最初手拍子だけしてごまかしていたら、アシュウィニさんが踊れ踊れというのでしかたなく一緒に踊る。ところがいつのまにか日本人がたくさん舞台上で踊っているのになにをやっているんだか。

13日(土) 気の抜けない2日目

科学院のみなさんは明日の飛行機でお帰りなのだが、今日の午後にマンガロールに移動して一泊するとかでみなさんチェックアウト。われわれは歩いて会場へ。と、柳川先生が「裏道を行こう」とみんなをあらぬ方向に連れて行く。絶対違うよな、と服部先生といいながらついていくと、柳川先生「あれっ」。で

もまあなんとかメインビルディングにたどり着いたときにはもう9時。「日本人はインド人より時間にルーズだと噂されますよ」とかなんとかいいながら会場へ。ちょうどセッションがはじまったところ。

最初は3つめのシンポジウムで最初はKerala大学のranked set samplingの講演。柳川先生が脇本先生のコントリビューションについてコメントされた。次はマニパル大学のManjunath Prasad先生のなんと懐かしい一般逆行列の話。

次はベイジアン的一般講演。お昼は例によってカレー。午後のセッションも一般講演の続きで、マニパルの学生さんたちが多数発表していた。もうこれですっかり終わった気になって、インドの会長や庶務理事に挨拶し、次は韓国がやるといっているがいか、と聞くと、お前はそれをクロージングで言え、という。は、聞いてないよ、と思ったものの、どうやらクロージングセレモニーでまた一同ひな壇に座らせられるらしい。

まあもう覚悟を決めてひな壇に上がると、最初はフロアから参加者が4人ほど、感謝の言葉。次いでわたしにスピーチしろとのこと。

「マニパル大学のスタッフのみなさん、学生のみなさん、そしてインド支部の方々のおもてなしとすばらしいカンファレンスに感謝いたします。残念ながら韓国支部からの参加者はありませんでしたが、韓国支部ではソウル国立大学のホー・キム先生を新会長に選出し、先日わたしのところにキム先生からメールがありました。韓国はいま旧正月の真っ最中で、旧正月は最大の休日で家族みんなが集まるので残念ながら出席できないとのことでした。しかし、韓国支部の方たちはわれわれが同意すれば、次の東アジア地域計量生物学会議を2011年に開催したいといっていました。また、その翌年の2012年には神戸で国際計量生物学会を開催します。神戸は大阪やわたしの所属する京都大学のある京都にも近い場所にあります。いま学生のみなさんは2年後には企業、大学、研究機関で働いていることと思いますので、ぜひみなさんと神戸に来てください、そして一緒に踊りましょう」

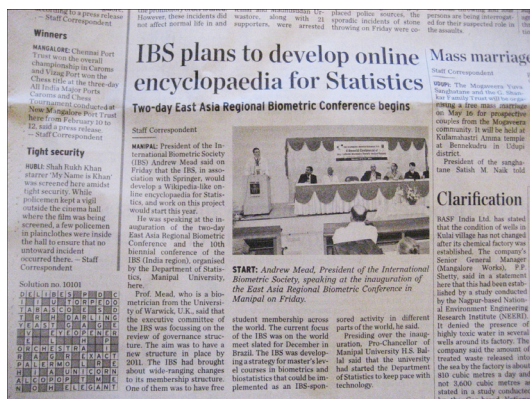
ひとりずつスピーチが続き、セレモニーが終わったのは1時間後の5時前。その後、大森先生、服部先生とともにお世話をしてもらったマニパル大学のDepartment of Statisticsにお邪魔し、Nair先生との交流を深めてEAR-BCが終了した。

11.2 高橋邦彦(国立保健医療科学院)

2月に入り関東でも雪が積もるような寒い日が何日か続いていました。そんな中、2月12・13日の2日間、最高気温が30度を超えるインド南部に位置するManipal Universityにおいて開催されたEast Asia Regional Biometric Conference (EARBC) 2010に参加してきました。EARBCは国際計量生物学会(IBM)のJapanese Region(日本計量生物学会)、Indian Region、Korean RegionとChinese Groupによる東アジア地域の計量生物学会の交流を目的として開催されています。2007年12月の第1回(東京)に引き続き、今回が第2回目の開催となりIndian Regionの大会(X Biennial Conference)との合同開催として行われました。インド国内からの参加者が大部分を占めていましたが、IBMのAndrew Mead会長の出席もあり、開会式には約70名が出席し、またMead会長の講演は複数の地元新聞の記事として取り上げられるほどでした。



開会式でのひとこま



開会式の様子を伝える地元新聞の記事

今学会のテーマは”Role of Biostatistics in the Emerging Research Context”とされ、2 日間で 4 つのシンポジウムセッションと 5 つの一般セッションおよびポスターセッションが行われました。日本計量生物学会などと同様、Epidemiology, Clinical Trials, Agriculture, Environment, Statistical Modeling, Bayesian Statistics, Data Mining など広範囲にわたる話題の研究発表や討論が行われました。年度末の忙しい時期ということもあり、残念ながら日本からの出席者は多くはありませんでしたが、佐藤俊哉会長、丹後俊郎前会長による招待講演を含め日本からは 9 題の発表がありました。インド国内の研究者からは、特にアプリケーションやケーススタディについての発表や活発な議論がなされました。またインド国内の大学院生などの発表もいくつかあり、それに対して参加した研究者や座長からコメントが出され、学生にとって研究成果を発表するよい機会となっているようでした。私自身も研究成果を発表するとともに、インド国内における biostatistics の状況を垣間見ることができ、有意義な学会参加となりました。



Mead IBS 会長, Kaliaperumal Indian Region 会長らと、佐藤会長、丹後前会長

ところで私自身を含め、日本からの参加者のほとんどがインドを訪れるのは今回が初めてでした。インドと日本の時差は 3 時間半と、それほど時差を感じるような距離ではない印象をもっていました。最寄りの空港 (Mangalore 空港) までの直行便は日本からはもちろんなく、またフライトスケジュールの都合で、インド国内に途中 1 泊しての旅程となりました。さらに Manipal までは空港から 70 キロほど離れており、約 1 時間半の車での移動となりました。初めて訪れるインドについては、ガイドブックや知人からの話を聞いて事前情報を少しは調べて出発したのですが、実際インドに入ってから驚くことが多く、聞くのと体験するのでは大きな違いがありました。最初に驚いたのはインドでの車の運転の荒さでした。クラクションをずっと鳴らしながら、車線を見直し、抜きつ抜かれつ、まるでカーレースのような交通事情であり、時には対向車が迫ってきている中での強引な追い越しが何度も行われ、それでいて歩行者はその間を平気で横断しているという、日本の運転に慣れている我々にはまるでジェットコースターや遊園地のアトラクションのような気分を味わえるドライブでした。しかし、何度もインドへ行かれインドをよくご存知の柳川堯元会長によれば、他の地域に比べればこれでもまだ良い方とのことで、ひどい地域だと、中央分離帯があっても反対車線を平気で逆走して追い越したりするのがインド流の運転だとのことでした。実際我々もインドを離れる日になると、最初の恐怖感はかなり和らいできたように感じましたが、さすがに自分で運転する勇氣までは出てきませんでした。

また日本人がインドで戸惑うのは、インド人の英語と食べ物でしょうか。ご存知の方も多いかと思いますが、インドの英語はちょっと独特の発音をする人が多く、我々もかなり戸惑いました。もともと私自身も英語がそれほど得意ではないこともありますが、簡単な英単語や文章が聞き取れず何度も聞き返してしまったり、逆に本当に初歩的な単語が相手に伝わらなかったりということもありました。しかしこれはこれで面白い経験でした。食事については、ガイドブック等にあるように水や生野菜、アイスクリームなど、気をつけなくてはいけないものがたくさんありました。しかし、熱を加え調理されているものについては、比較的安心して、その上大変おいしく食することができました。インドといえばカレー (Curry) というイメージですが、カレーもしくはカレー風味の料理が必ずといっていいほど食事に出てき、いずれも期待に違わず本当においしいものでした。また Manipal は海に近い地域であることからおいしいシーフードのカレー料理なども食することができました。

開会式で Manipal University の方が挨拶していましたが、Manipal はこの比較的新しい大学が中心となっている町で、国際学会もいろいろと開催されているとのことでした。今回の学会においても Manipal University の学生がスタッフとして我々海外からの参加者に親切で丁寧な対応で接してくれました。また 1 日目の夜にはディナーパーティーが催され、そこでも学生のパフォーマンスとして伝統的なダンスから最近のダンスまで踊りを披露し、参加者を楽ませてくれました。インドでは音楽およびダンスはかなりポピュラーなものであり、ほぼ誰でも踊りを楽しんでいるとのことでした。ディナーパーティーでもおいしい料理を堪能した後、参加者も次々にステージに上がり、大音量の音楽に合わせて踊りを楽しみました。とくに佐藤会長は名指しでステージ中央に招かれ、インドの人々に混じって激しいインディアンダンスを披露してくださいました。これまで私は IBS の学会 (IBC) の 2006 年モントリオール大会、2008 年ダブリン大会に参加し、それぞれのディナーパーティーにも出席しました。どちらも最後には参加者も混じり、その地域の踊りを踊っていたように記憶しています。それ以前の大会はわからないのですが、IBS 関係の学会のディナーパーティーでは踊りはもしかしたら恒例行事なのかもしれません！



ステージ中央でインディアンダンスを踊る佐藤会長



ディナーパーティーでのひとこま 1



ディナーパーティーでのひとこま 2

ご存知のようにIBCは2年毎の大会で、今年12月にはブラジルで開催されます。またその2年後の2012年8月には我々日本計量生物学会が中心となり神戸での開催が決定しています。IBCは全世界から研究者が集まるかなり大きな大会ですが、それに加え地域ごとの連携もそれぞれ行われているようです。今回のEARBCも東アジア地域の研究交流や連携を深める一環であり、この大会は隔年のIBCの間の年に開催され、次回はIBCブラジル大会と神戸大会の間にあたる2011年に韓国で開催される予定になっているそうです。海外における学会への参加は日本のbiostatisticsを世界にアピールする場として、海外の研究者と知り合うことが出来る貴重な機会でもあり、また神戸大会の成功に向けたアピールの場としてよい機会であると思われます。また今回のように海外の文化に触れるとともに、海外の研究者との交流はもちろん、日本の参加者同士での交流も深められ、普段とは違った先生方の一面も見ることが出来るかもしれません。今回の学会参加は私にとって楽しく貴重な時間を過ごせる有意義な体験となりました。是非今後のIBCやEARBCに皆さんも参加されることをお勧めしたい

と思います。

⑫ 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

松井茂之（編集担当理事）

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていなくてもノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者(著者)名は掲載時には匿名も可とする。

5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。投稿に際しては、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程を参照ください。

また、2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABESに掲載された論文の著者(単著でなくても第1著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞」です。最近では、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くとか公募の際に引け目を感じるくらいです。会員諸氏の意欲的な論文投稿をお待ちしております。

計量生物学会ニュースレター102号
2010年2月28日発行
発行者 日本計量生物学会
発行責任者 佐藤俊哉
編集者 酒井弘憲、和泉志津恵